

幸せな黒猫

黒兔玖乃



一、幸福の儀式

「……よし、これで完璧」

私はそう呟いて、右手に握り締めた木の棒をぱっと上げた。

左手には、「幸せを呼ぶ魔法」と銘打たれた、少し厚めのオカルト本。……その二三七頁、「幸せを呼ぶ使者を呼び出す魔法陣」なるものを私は信じ込み、今まさにそれを家先の砂地に書いている最中だった。

で、ようやくその製図が終わった。我ながら上手く描けたと、私は感心する。

時刻はもう恐らく深夜二時を越えているだろう。

つい綿密に描きすぎて、十二時頃から始めていたと思っていたのだが、気がつけばもうそれから既に二時間が経過している。

過剰に没頭した人間が陥る時間感覚喪失に、私は遭遇した。親が旅行中でいなかったことに対して、結構本気で安堵を感じている。

私は木の棒をぽいと放り投げ、序で左手で開き持っていた魔法書（仮）をたたみ、眼下の魔法陣を目にして仁王立ちする。

僅かな砂と地面の凹凸で造形された、拙い魔法陣。

夜風がひゅうと吹き、初夏の湿った空気をかき混ぜる。

その撫でられるような感覚に、私は両目を閉じて浸る。

「これで私も、幸せになれるんだ……」

と、口元に気持ち悪い笑みを浮かべる。よく、友人から気持ち悪いと言われるのでそう表現しているが、実際の所、私はかなり微笑ましい笑顔だと確信している。

でも流石に友人の言葉を真に受けないわけにはいかないのだから、そう言うことにしている。そんなことは今はどうでもいい。

私は再度確認するようにマジックブック（仮）の二三七頁を開き、そこに記されてある「使者を呼び出すための呪文」の羅列を凝視する。

「えっと、呼び出すための呪文は……『我は望を請う者に在り。我が望みを叶えたまへ、神ラケシスよ！』か……。長いなー」

長い上に、所々読める自信がない。

われはのぞみを……せいう？ これって請求の請だよな？ せいうものにあり。

わがのぞみをかなえたまえ、って、へ？ これって「え」って読むの？ それとも「へ」？ へでいいか。かなえたまえ、かみらせしすよ！ よし多分完璧。

「……自信ないけど、間違っただとしても神様は許してくれるでしょ、多分」

私は根拠のない確信を呟き、膝をかがめて自分の隣に魔導書（仮）をそっと置く。

ここまで来たらもう分かると思うけど、私はかなりのオカルトマニアだ。

と言っても、宗教問題にまで関わるほど壮大なものでもない。ただ、自分で勝手に買ってきたオカルト本を読み漁り、手当たり次第にその内容を実践しているだけだ。

で、今回実行しているものも然り、私は今「幸せになるための方法」なるものを模索している

。それこそ最初は一寸先の闇にある石橋を叩いて渡るような思いだったが、今ではその石橋さえ叩いて壊してしまいそうなほど、私の心は高揚している。

何故か、と問われると、言うまでもないだろう。

まさに私が求めていた、「幸せを呼ぶ魔法」とタイトル付けされた本を遂に入手することに成功したのだ！

私は絶頂に達した。落ち着け、落ち着いて素数を数えろ、と真面目に鼻息を荒くしながら、その内容をなめずりまわすように熟読玩味した。

もちろんのその中身は素晴らしいもので、その中で最も興味を持った「幸せを呼ぶ使者を呼び出す魔法陣」を早速実行しようと試みて、今に至ると言うわけだ。

———そして今、その全ての準備が整った。魔法陣は、完璧に描いた。呼び出す呪文も、…多分、完璧に覚えた。幸せになることに対する勇気の準備も、歓喜の台詞の練習も、十二分に重ねた。

完璧すぎる……。これ以上ないほどに、完璧。完全無欠。完璧パー璧パーフェクト。

「……よし、始めよう」

そうって私は両手を空に掲げ、まるで召還獣でも呼ぶように（実際それに近い行為だけでも）、高らかに呪文を唱え始める。

『我は望を請（せい）う者に在り。我が望を叶えたまへ……！』

と、その瞬間。

「マーオ」

私は、いつの間にか魔法陣を挟んで対極に黒猫が座っていたことに今更気付き、焦りのせいでつい、

『くろねこおおおおお！！！！』

と、叫んでしまった。

うん。黒猫は不幸の象徴だから、嫌いです。

二、ネコ耳執事

「ほら、青空が綺麗だ。今日もきっと良い事あるさ」

「……………」

「すがすがしい天気。ちょっとぐらい元気だせだせ」

「……………」

「何がそんなに不満なんだい？」

「私がこの世で一番嫌いなもの知ってる？」

「いいや」

「黒猫よ」

「ありゃりゃ」

私はあの後、放心状態で家に戻って、すぐに眠ってしまった。疲れていた所為もあるけど、とにかくその夜の不幸を忘れようとして必死だったのかもしれない。

昨夜の儀式は、敢えなく失敗に終わった。……いや、厳密に言えば失敗じゃないのかもしれない。失敗はしてないけど、それ自体が失敗を招いてるんだから、失敗？ うん？ 私は誰？

「まあ今日も世界は回っているのさ」

「何綺麗に締めようとしてるの、バッカみたい」

私が懸命に思考をめぐらせている所に、隣を歩く生き物は後先考えず横槍を入れてくる。

何でこんな奴と、学校に行ってるんだろ。こいつが勝手について来ているだけか。あ、そうだった。で、走って振り切ろうとしたけど結局追いつかれたんだった。こいつ、人間じゃない。

……色んな意味で。

そんな私の事は気に留めず、今日も天道様は陽光を注いでくる。

「僕は貴方に呼ばれて来たんだ。どうしてそんなに僕を拒む？」

「別にあんたなんかどうでもいい。あんたなんか踏み切りに飛び出して特急電車に轢かれて見るも無残な姿になってしまえばいい」

「それはそれは、随分と残酷な死に際だね」

隣の生き物は肩を竦める。死に際って、それでも即死せんのか、お前は。

「大体なんであんたは私に付きまとうのよ」

「……？ 何で主とあろう人がそのようなことを？ 決まっているじゃないか」

私の儀式は、決して失敗ではなかった。

ちゃんと使者を呼び出していることに、間違いはなかった。

私の望んでいた使者と言うのは、従順、眉目秀麗、全てが完璧に整った、それでいて少し親近感のある、執事のような使者だった。

ところが、私が呼び出したのは。

「従順」……一応従順だけど、完璧に従順ってわけじゃない。自由奔放。

「眉目秀麗」……冷静に見ればそう見えるけれども、冷静には見れない。

「少し親近感のある」……ありすぎ。

執事と言うより、幼馴染に近い感触の使者だった。

そもそも執事という人種には、主に対する忠誠心というものが植えついている。自信がどれほ

ど深い傷を負っていようとも、主のためならば命までも差し出す。それが執事の絶対的条件であって、なくてはならない執事のアイデンティティ的要素だった。また、それが執事の人気のある所以だった。

だから私の呼び出した使者には、忠誠心なるものが植えついていなければならなかった。けど。

「そんなに毛嫌いしなくてもいいじゃないか〜」

「毛があってもなくてもあんたは大っ嫌いよ！」

私が呼び出した使者には、猫耳が植えついていた。

○

その日の昼休み。

私は親友の歩美にこの旨を打ち明けてみた。

「へーそりゃ災難だったわねー」

当然と言えば、当然の反応だ。

「真面目に聞いてよ。これは私の人生に関わることなんだから」

「だってねえ。何回聞いても、いくら優子がオカルト好きって知ってても、そんな話は一朝一夕じゃ信じられないからねえ」

「まあ、それはそうだけど……」

「多分、疲れてるんだよ。それで、幻覚じみたもの見たとかさ」

そうかなあ、と私は口をすぼめて呟く。

今朝堂々と私の隣を歩んでいた人間《くろねこ》が幻だったとは、俄には信じられない。

「あれは絶対現実だと思ったんだけどなあ……」

「でも、呼び出したのは違う使者なんでしょ？ どうしてそんなに信じたがってるの？」

その問いに、私は悠然と答える。

「呼び出した使者が間違ってるのはもうどうでもいいの。問題は、その使者が本当に呼び出せた者か、もしくは私の妄想の延長線上に発生した幻覚かどうかよ」

「いや幻覚ではないよ、僕は」

「ほら、使者さんもそう言ってるじゃない。だからそれは幻覚……あれ？」

「そうよね。私が望まない使者なんて発生するわけがないよね……あれ？」

私達が向けた視線の先には。

窓からこちらを覗きこんでいる、猫耳を被った男の姿だった。変態だ。

「やあ」

「ナニアンタ？ ドウシテソナトコロニイルノカシラ？ アンタナンカマボロシダッタラヨカッタノニ。コノクソクロネコガ」

「優子。あんた顔怖いよ。ていうか、本当に……」

「そうそう」

窓の向こうの変態は、実に爽やかな顔で受け答える。

「僕は主によって呼び出された使者である。名前はまだ無い」

「付ける気も無い。酒に溺れて死ぬ」

「私としては優子はその結末を知っていることに驚きだわ……」

失礼な。まあ、始まりと結末しか読んでいないけど。

「でも優子。結構可愛い顔してるじゃないこの使者。……っとその前に、あんたの話を信じてなかったことを謝らないとね。いやー、ゴメンゴメン」

「謝らなくていいわ。こいつは欠陥品だから」

「傑作品だなんて、主、そこまで褒めていただかなくても……」

「聞き間違いも大概にしろ」

品扱いしてることには突っ込まないのか。

「じゃあ、私が名前をつけてあげる」

「いいって歩美」

「うーん……………、前田ニコラス啓次郎ってのはどう？」

「何そのネーミングセンス」

「じゃあ、ルクセンブルク二世ってのは」

「もはや名前かどうか疑わしいよ」

「じゃ、間を取って『ニコル』で。うん決定」

「どこが間!？」

多分ニコラスの「ニコ」とルクセンブルクの「ル」だろうけど。

「へえ、ニコルか……。悪くないですね」

「でしょう？ それじゃ、貴方は今日から『ニコル』よ。よろしくねニコル」

「はい、よろしく申し上げます主の友人殿」

「歩美でいいよ」

「それじゃあ、歩美殿」

「もうそのままあんたが貰っちゃいなよ……」

私は呆れて机に頬杖をついた。このまま教室内の喧騒に紛れてしまいたいくらいだった。

というか、どうしてみんなこの糞黒猫————もといニコルに気付かないんだろう？

「いえいえ。私は主の臣下ですから」

「いえいえ。貴様なんぞ臣下どころか奴隷以下ですから」

「……そのやり取りを見る限り優子が主には適任だと思うけど、私」

何ですと。

「そう思う根拠を窺いましょうか」

「私は主の邸宅へ伺いましょうか」

「死ねニコチン」

「私の名前はニコルブルク四世でございます」

「うん、やっぱお似合いだ……。ってか、名前くらい覚えようよ」

その時。昼休み終了の予鈴が鳴り響いた。

私は次の授業の準備をしようと、歩美を置いて立ち上がる。

「あ、もう昼休み終わっちゃった。それじゃニコル、バイ……あれれ？」

窓に視線を向けたまま疑問符を上げる歩美に、私もつられて窓の方を向く。

「どったの、あゆ……あれれ？」

どこぞの使者のニコチンは、いつの間にか姿を消していた。

流れるように。ちょうど、風が通り過ぎるように。

「何なのよ、あのニコラス・啓次郎は……」

「だからニコルだって」

三、執事ニコル

「そういえば優子」

「何？ 歩美」

「あんた使者には傲岸不遜を求めているって言ってたよね？」

「無論そうですが」

言ってなかったけど、確かにそれも求めている。

「傲岸不遜の意味って、知ってる？」

「自分を偉い人間と考えて、相手を見下した態度をとるさま」

「それって従順な使者じゃなくない？」

「何言ってるの歩美！ 使者もとい執事には見下されてナンボでしょ！」

「……あんた苗字はSなのにな」

それは私がマゾヒストとでも言いたいのか。とんでもない。

私達は陽の暮れた住宅街を歩きながら、銘銘の自宅へと向かっていた。歩美とは方向が同じなので、こうして途中まで二人一緒に帰っている。これはもう何年も前から続いていることだ。

……二人だけの、帰路ならば。

「主、今日の夕飯は何ですかニャ」

「なにあんたきもい」

「何言ってるのよ優子、こんなに可愛いニコル君を」

私がきもいと言う所以は、猫が喋っているっていうのもあるんだけど。

「ていうかあんた、猫にもなれるんかい」

「はい、自分猫ですからニャ」

まあなれなかったらただの猫耳つけた変態だからな。

「いいなあ優子。こんなに可愛いニコル君が従者だなんて」

歩美がしゃがみこんでニコルの喉を撫でる。ニコルは猫らしく、ゴロゴロを喉を鳴らした。

こうしてれば普通の猫なのに。いや、黒猫っていう時点で却下なんだけど。

「ところで優子。ニコル君は一体どこに寝泊りするの？」

「えー……？」

そんな事一瞬でも考えてなかった。猫の寝床か。

「外でいいんじゃない」

「いやいやそれはないでしょ」

「なんという心の広いご主人様……！ この星全てを我が寝床としてよいのですか！」

ポジティブ思考にも程がある。

「そんな事言わずにさあ。家に入れてあげなよ」

「まず第一にうちはペット禁止条例があるからっ！」

そうだ。私、桜井優子の家には、ペット禁止条例と言うものがある。

間違いなくニコルは引っかかるだろうから、私が家に上げる意思を見せてもそれが叶うことはない！

「それじゃあ……」

そう呟くと、「ボンッ」と言う音と共にニコルは煙に包まれたかと思うと、人間の姿になった。

「この姿ならOKですね」

「余計に駄目じゃあ————！！」

○

「全く……何考えてんだかアイツは」

私は家に帰り着くと、家中の窓という窓と扉という扉の鍵を全てかけて、我が家をシャットダウン状態にした。これだけしとけば、いくら猫でも入ってこれないだろう。

ようやく私はソファに座ると、そのまま肩の力を抜いて仰向けになった。

「はあ、アイツのせいで今日は疲れたなあ……………もう寝ようかな」

「いえ、衛生上は入っておかねばいけませんよ」

「そうだよ、面倒だからって入らないわけには行かないもんね」

「その通りですご主人様」

「ところでニコル」

「何でしょうかご主人様」

「どこから入ってきたこの変態猫めえええええ！！」

私の右ストレートが空を切る！ くっ、避けられた！

「ふふふ……僕の力を舐めてかかってはいけませんよ。ご主人様に気付かれずに玄関の鍵をピッキングすることなど、従者に習得すべき能力のほんの一部です」

いい事を教えてあげよう。この国ではそれを犯罪者と言うんだ。

「今すぐ警察に連絡をっ！」

私は机から落ちそうになったシャーペンを拾うときぐらいの凄まじい反応速度で、家に唯一ある固定電話の元へとダッシュ！

さすがにニコルも反応できずに直立したままだ。これならいける！

「警察の電話番号は……11」

「7」

『只今の時刻は、十八時三十六分五十秒で……』

「んなこと誰も聞いてねええええ！！ 警察の電話番号はあ！」

「177」

「十六時現在、〇〇県の天気は……」

「天気なんてどうでもいいんだよおおお！！ ……はっ！」

危ない危ない。ニコルのペースに持っていかれるところだった。落ち着け。落ち着け私。落ち着いて素数を数えれば、大丈夫だ。

「235711131719……」

『お掛けになった番号は、使用されておられません』

「うわあああああ！！」

===しばらくお待ち下さい===

「……で、アンタは一体何のためにここにいるのよ」

「はは、何を今更」

ニコルは自分で注いだコーヒーをすすりながら、微笑する。

湯気が立っているのに飲んでいる。猫は猫舌っていうのは迷信だったのかな。

「ご主人様の願いを叶えるためですよ」

「黒猫が？ そんなの出来るわけじゃない、不可能よ」

私は自分に注がれたコーヒーを眺めながら言い放つ。

ニコルが私のコーヒーにミルクと砂糖を入れる。あれ、何でコイツ私のいつものミルクと砂糖の量知ってるんだろう。

「いえ、何でも人生やってみなければわかりませんよ」

愛想のいい笑顔を浮かべながら、ニコルが諭すように答える。

そんな事を言われても、ソースが猫耳つけた変態だから納得できない。

「とにかく、私にはこれ以上アンタに構う義理はないから」

今日はもう寝よう。従者と言うんだったら主人の部屋に忍び込んだりまではしないだろう。

一応、釘は刺しておこうか。

「私の部屋に勝手に入ってきたら、許さないわよ」

「はい、承知しています」

ニコルは笑顔で答える。

私はリビングを後にすると、さっさと二階の自分の部屋に飛び込み、布団に包まった。

(なんだ……そこのところはちゃんと従者なのね)

ともかく、明日の朝になったらこの家から追い出そう。そうだ、それがいい。いくらなんでも真っ当から拒絶されれば、アイツであろうと私から離れていくはずだ。そして一ヵ月後、私はまたあの儀式を行えばいい。うん。私の計画は絶対に狂わない。

私が心の中でそう高らかに宣言したとき。

『いやぁ、メールだよ (CV:アナ○さん)』

「うん……、こんな時間にメール？ 誰だろ」

携帯のメール着信音が鳴った。歩美は別の着信音にしているから、他の誰かだ。他の誰かって、私には歩美以外の友達はほとんどいないのに誰だろう？

私は芋虫の如く携帯のところまで這うと、手にとって待ち受け画面を開く。

【From：北条晴樹】

「きたじょう……？ 誰だっけ」

とりあえず迷惑メールとかそういう類ではなさそうなので、開いてみる。

【本文：藤村から聞いたんだが、お前にニコルっていう従者が出来たんだって？ 面白そうだから、明日そいつ連れてきてくれよ】

藤村……というのは歩美のことだ。成る程、それなら少々納得がいく。

要するに歩美からニコルの話を聞いて、信じられないから連れて来いよみたいな感じだろう。このきたじょうっていう生徒（名前から察するに恐らく男子）はよっぽど人間不信なんだろう。

「別に返信しなくてもいいか……」

私は携帯をたたむと元の場所において、尺取虫のように布団のほうに這って、再び布団に包まった。

(とりあえず明日学校に連れて行って……ニコルは帰り際にさりげなく拒絶しよう。それでいいや)

四、雨の日の朝

「……あなた、一人なの？」

「……………」

「それじゃあ、私がお友達になってあげる」

「……………」

「私の名前はね———」

○

しばらくぶりに、雨が降った。ぱらぱらとした雨だけど、朝方なのに空は暗い。

私はトーストにかぶりつきながら、ぼうと窓の外を見つめる。

朝起きてリビングに降りてみても、ニコルの姿はどこにもなかった。不覚にも一瞬心配してしまっただけ、すぐにどうでもいい事だと頭の隅に追いやった。

きっと、外をぶらぶらうろついているんだろう。そんな風に考えていた。

自分で淹れたコーヒーをすする。砂糖の量を少し間違えたのか、少々苦い。

なんだかどうも、気が乗らない。天候が悪い、っていうのもあると思うけど、そんなんじゃない。そもそも、私は雨が嫌いではない。何故かは、あまり覚えてないけれど。

「……何なんだろう」

考えても分かりそうになかったので、私はさっさと学校に行く準備を始めることにした。

「……………あれ？」

ちょうどその時だった。

カーテンが僅かに開いた窓から、雨の中に立っているニコルの姿が見えたのは。

「何してんだろ、アイツ」

特に様子を見に行くわけでもなく、コーヒーを飲み干して、制服とか平日課題だとか学校に行く準備を私は始めた。

でも、やっぱり気になるものは気になるもので。

私はニコルがいなくなったのを確かめた後、ビニール傘を刺して、雨の中の外へ出た。湿気がむわんとしていて、じめじめとした気持ち悪い空気。でも、雨は嫌いじゃない。理由は分からない。

ニコルが立っていた場所と同じ場所に屹立して、周囲を見渡してみる。

ブロック塀に、電柱に、点在する水溜り。特に目立って変わった部分はなかった。

「そうになると余計気になるんだけどね」

私はいかにも探偵っぽく、手を顎につけてうーんと唸ってみる。けどどこかの名探偵みたいにあっという間に真理を導けるはずはない。私は探偵でもなければ、頭が回るわけでもないのだ。

なんだか気が乗らなかったのも、水溜りの水を思い切り蹴って吹き飛ばす。靴が濡れる。この靴は履いていけないから問題なし。ただちょっと臭う。部屋干し臭いんだよなあ。

と、足元に何か違和感を覚えた。

それと共に、一枚の紙のようなものが、宙を舞う。

「？」

水気を含んでするりと落ちていくそれを拾い上げると、写真だという事が分かった。

映っているのは、一人の少女と一匹の猫。黒猫だった。

「これ、もしかしてニコルが落としたのかな？」

余計なお節介、何であいつの落としたものなんかをと考えたけれども、とても古くて大事そうにされている写真のようだったので、とりあえず家まで持って帰って乾かしておくことにした。

特に目的もなく突っ立ったままの私は、早く学校へ行こうと、そそくさと家に戻った。

その日の昼休み。

「という事が朝あったのよ」

「ふうん」

私の報告に、歩美は紙パックのストローを吸いながら気だるそうに答える。

「それ、本当にニコル君の落としたもの？ 間違ってたらどうするの？」

「いや、きっとそうだよ。ってか、絶対そう」

「そう思う根拠は？」

と言われて、私は思わず言葉に詰まる。

実際、根拠なんてものは微塵もなかったからだ。ただの、直感。

「なんとなく、それっぽいかなー、なんて」

「まああなたの直感は当たりやすいからバカに出来ないからね」

「そうでしょう、ふふふ」

「あなたの誇大妄想はバカに出来るけどね」

「何たることか!？」

私たちがそうやっていつものように話していると。

「あれ、桜井。連れて来てくれてないのか？」

と話しかけてきたのは、特に離れたことはない男子生徒。茶髪。連れて来てないって、もしかしてニコルのこと？

あ、もしかしてこの人がきたじょう君？

「っと悪い、まだあんまり話したことなかったな。俺は北条晴樹。間違ってもきたじょうじゃないぞ」

「北条君。いくら優子がアブない子だとしても、そこは間違えないわよ」

「だよなあ。あっははは」

お願い……私を……見ないで……。

「それで？ 今日はいないのかニコルって奴は？」

「ああ、うん。今朝から見かけてないの」

「なんだよー。ちょっと楽しみにしてたのにさー」

ちえっ、と残念そうに北条君が舌打つ。欲しいなら引き渡しても良いんだけど。

「それにしても、どうしてニコル君いないんだろうね？」

歩みがもっともな疑問符を浮かべる。私とてそれは分からない。

「どうしてなんだろう……？ 別にいてもいなくてもあまり変わらな」

と、その時。

「桜井！ 桜井はいるか!?!」

半ば叫びながら教室に飛び込んできたのは、担任の中村先生。表情と声色から察するに、相当焦っているみたいだ。それにしても、私何か悪いことしたかなあ。

「先生？ そんなに慌ててどうしたんですか？」

「おお桜井！ ちょっと来てくれ！ もう先生方ではどうにもならんのだ！」

その言葉に、私はなんだか嫌な予感を覚えた。ま、まさか。いやそんなはずは。

「お前の執事とかいう奴が、職員室にやって来たんだ!!」

そのまさかだった。

五、我慢の限界

私は先生の後を追いかけてながら訊ねた。

「一体ニコルが……そもそもどうしてここに？」

「俺にもわからん。とにかくお前を探してやってきたようなんだ」

焦燥しきった先生の声からして、それは恐らく本当なんだろう。

だとすると、どうしてニコルは私のいる教室まで来なかった？ 教室の場所は分かっているはずなのに、よく分からない奴だ。

ともかく、北条君に見せる手間が省ける。早いとこ連れ出して北条君の所に……

と、その時。

目の前まで迫っていた職員室から、一人の先生が飛び出してきた。

「はぁっ……はぁ……っ！？ さ、桜井！ 来てくれたのか！」

少しメタボ気味な先生が、救世主が現れたとでも言わんばかりの目線を投げかけてくる。

口の周りについているご飯粒が汚らわしい寄るな。

「先生、ニコルが一体何を？」

「そ、それは………とにかく早く職員室の中へ！」

「は、はい」

答える暇も惜しいほど、深刻な事態のようだ。まさか、先生に怪我を負わせたとか重大な事件を起こしているのだろうか。まずい、それはまずすぎる。

「ニコルッ!!」

私は半ばやけになった声で、思い切り職員室の扉を開ける。

そこに広がっていた光景は、ニコルが何人もの先生に暴力を振るって――――

「ニコル君、お茶をもう一杯いただけるかな？」

「はい、もちろんです」

「ニコル君。このコーヒーは本当に美味しいね。どこの銘柄だい？」

「ふふ、安物ですよ。淹れ方次第で味はどうにでもなるんです」

「ほほう、まるで生徒のようだな。やり方次第で成績はどうとでもなる」

「仰るとおりでございます」

お茶やコーヒーを振舞っていた。何この光景シュール。猫耳男が先生方のお茶くみしている風景すぐくシュール。どうなってもいいからぶん殴ってやりたい。

って、

「どうして私はこんなに冷静でいられるんだ!？」

「あ、ご主人様」

ニコルは私の声に気が付くと、机にお盆を置いてこちらに走ってきた。寄るな。

「あんた一体何してんの!？」

「それです。聞いてください。ちゃんとした理由があるんです」

いつになく（会って間もないけど）真剣な顔のニコル。本当に何かあったのかな。

私はニコルの声に耳を傾ける。

「私はご主人様の所へ向かおうと……走りました。走りました。しかし道に迷ってしまい、途方に暮れていた所を心優しい先生方に助けられ、何とか学校に辿り着けました。しかし優子様の教室の場所までは分からなかったの……職員室でお茶くみをば」

「そこ!! なんて最後そこに飛躍する!？」

「これでも執事の端くれでございますから。それはそうと、優子様。どうかなさったのですか？

血相も変えられて、なんだか怒っているようで……」

「いい加減にしてよ!!」

もう、我慢できない。

「いきなり執事執事とか言って出て来てさあ!! やることは全て必要もないようなことばかり!! あんた一体何様のつもりなの!? 一体何の目的でやってきたの!？」

「あ、それは」

「そもそもの話よ!! あんた黒猫でしょ!? 私ね、黒猫は大っ嫌いなの!! 分かる!? だからあんたなんて私には必要ないのよ!!」

「優子様……」

「もうあんたなんか知らない!! 何処か行って死んでしまえばいいんだ!!」

私は職員室を脱兎の勢いで飛び出すと、脇目もふらずに駆け出した。

何なのよ、あいつ。執事とかいう割には私の嫌がることばかりして。頭おかしいんじゃないの!？」

もう決めた。あいつなんて知るもんか。本当に死んでしまえばいいんだ。死ねばいいんだ。

———黒猫、なんか。

「優子……様……」

六、人間と人間

「……………」

勢いで学校を飛び出した後、私は雨の中を只管に走っていた。

何がしたいわけでもない。何か目的があるわけでもない。何かを追いかけているわけでも、何かから逃げているわけでもない。強いて言うなら、何もかもから逃げ出したいというのが本望だ。だけど、そんな事叶はずもないから、それから私は逃げ出す。自分の意思が弱いことなんて、昔から分かっていた。

だからこそ私はオカルトなんていうものに興味を持って、今となっては頼りにまでしている。そしてそのオカルトの末路も、あんな奴を召還してしまうなんて言う最悪の結末になった。

私はオカルトに生きていた。

オカルトがない私に、アイデンティティーはなかった。

オカルトがなくなれば、私は死ぬ。

死ぬ——とは、少し違う。

”生きられない”。

小雨の降る住宅街を突っ走る。このまま進んでいけば、大通りに出る。

大通りに出たら、どうしよう。そこら辺まで走れば吹っ切れるかな。そしたら家に帰ろうか。学校には絶対帰らない。

あと、死ぬ、で思い出した。

幼い頃、私は確か自動車事故に遭いかけて死にそうになったことがあった。

どうして助かったなんてことは覚えてないけれど、何かに助けられたという記憶はあった。

——何で今、こんなことを思い出してるんだろう。

全く関係ないことのはずなのに、どうして？

「ふう……………」

大通りまでやってきた。信号は赤に変わったばかりでしばらく変わりそうにないので、歩道橋を使ってわたることにする。よくよく考えれば私の家はこの大通りを通り切った先にあるので、最初から家に帰ろうとしていたのかもしれない。鳩が自分の巣を覚えているように、無意識に。

私は老人よろしくゆっくりと階段を上がる。久しぶりに全力疾走したもんだから、結構足にキテる。運動不足がたたったなあ。オカルトばかりじゃいけないのかな。

下を見下ろすと、昼間だつてのに相変わらず鉄製の乗り物が右往左往している。

見てみれば、ウインカーもつけずに車線変更。携帯電話を耳に当てながら走行。窓から煙草のポイ捨て。制限速度オーバー。意味もないクラクションの連呼。

最後らへんは想像だけど、きっとそんなもんだらう。人間なんてどうせ自分が一番可愛いなんて思ってる生き物なんだから、あながち間違っただけはないはずだ。人間なんて、くだらない。

そんな事言ってる私も人間。

それは絶対に、覆ることはない。

私はなんだかひどく悲しい気分になって、さっさと歩道橋を渡ることにした。

瞬間、私の鼓膜を甲高い大音声が劈いた。

キキィ、という悲鳴のような音。

「……………」

特に関心を寄せるわけでもなく、音がした方向に一瞥をくれる。

横断歩道の辺りで何台かの車が停まっている。女性の悲鳴も聞こえるし、きっと何か事故でもあったんだろう。それにしても轢かれた人とかが見当たらない。何が轢かれたんだろう。

私は本当に少しだけ興味がわいたので、手摺に寄って覗き込んでみる。

猫が轢かれていた。

それも、真っ黒な毛を雨に濡らす、黒猫が。

「……………なんだ」

私の興味は一瞬にして失せた。

黒猫が死んだとか、別にどうでもいいことだ。むしろ喜ばしい。不幸を呼ぶ生き物なんて死んでしまえばいい。そうすれば皆幸せになるだろう。少なくとも、私は。

もちろん仮に人が死んでいたとしても、私の興味は変わらず消えるだろう。

今生きている私と今死んだ人の生きるベクトルなんて、全くもって違うのだ。私には、私の。その人には、その人の。一人一人の生き方っていうものがある。そのベクトルは決して交わることはないし、交わったところで結局は打ち消される。

原義として、全ての人間に関係性はない。

それは私は昔から思ってる、最も明らかなことだ。

私はさっさと歩いて、家に帰ることにした。

○

「……ただいま」

「あら、お帰り。随分と早い帰りね」

「うん、ちょっとね」

家には既に母親が帰って来て、頭にバンダナを巻いていた。掃除をしているんだろう。手にダ
○キンのモップも持っている。使いやすいよね、それ。

私が部屋に向かおうとすると、母が思い出したように話しかけてきた。

「部屋に荷物置いたら下降りて来てね。見せたいものがあるから」

「？ うん、分かった」

なんだろう、と思いつつ私は部屋に上がる。

いつもと遜色ない部屋だけど、なんだかちょっとくすぐったいにおいがする。なんだろう、これ。

その時、私は床に自分のものとは違う髪の毛が落ちていることに気が付いた。

いや、違う。髪の毛じゃない。

これは、猫の毛だ。

「……………ニコル」

もう名前を出すのも煩わしかった。もう考えないようにしよう。

私はベッドの上に荷物を放ると、母の言う通りに下へと駆け下りていった。

「懐かしいでしょ、この写真」

そう言って母が見せたのは、私が今朝拾った写真だった。

「懐かしいも何も……私は覚えてないんだけど」

猫のことなんかいちいち覚えていない。

「あら、そうなの？ あんた覚えてないの」

母は意外そうな顔でそう言った。何か、大事な写真なんだろうか？

「何、これってそんなに大切な写真だっけ？」

「当たり前よ———」

次に母が発した言葉に、私は驚きを隠せなくなった。

「あんた、この猫の命の恩人じゃない」

七、雨中の幻影

「私……………が？」

「そうよお。あんたこの猫が轢かれそうになっていたところに飛び込んでいったんだから。猫が轢かれるなんて可哀想だ、なんて言って。まったく、あの時はハラハラしたわー」

母の言う事が全く信じられなかった。

話によると、私はこの猫を助けるために夢中で道路に飛び出して行ったらしい。そして無事に私も猫も轢かれずに済んだとの事。何で黒猫なんて助けたんだろう、私。

「でね、その猫がまた不思議な猫でねー」

「不思議な……？」

「そうなのよー」

母は言う。

「その猫、特に何かあるわけでもないのにあんたのことばかり見ててね。朝ご飯を食べてるときも、コーヒー飲んでるときも、遊んでるときも、寝てるときも。ずっとあんたに付き添ってたのよ」

「え……………」

「あんたもそれを喜んでてね。いつも一緒に遊んでいたものよ。それが突然、ふとした拍子にいなくなっちゃって、どうしちゃったのかしらね」

笑いながら、楽しそうに語る母。

そんな母の話を聞いてから、私は再び部屋に戻った。

ベッドの上で体育座りになる。

そのまま布団の上に倒れる。

目を瞑る。

考えてみる。

———思い出して、しまった。

私が昔助けたのは、黒猫。車に轢かれそうになって助かったっていう記憶も、正しく言えば猫を助けるために飛び出して、運良く助かったのだ。

そして、母が最後に言った言葉。

『あれだけ大切にしてたんだもん。いつか、恩返しに来てもおかしくないわね』

私が助けた、黒猫。

もしかして、その正体は———

私はいつの間にか、外に飛び出して走り出していた。

疲れて棒のようになった足も、なんのその。目指す所は、たった一つ。

あの、横断歩道。

私が黒猫を助けた、大通りの横断歩道。

先刻猫が轢かれているのを見かけた、横断歩道。

雨に降られて服がびしょびしょになるのも構わず、水溜りに踏み込んで泥まみれになるのも構わず。

私は本降りになってきた雨の中を、無我夢中で駆けて行った。迷いなんてもうない。好き嫌いなんてもう関係ない。

ただ絶対に———何か言わなければならないことがある気がして、私は無心のうちに外へ飛び出したんだ。

ああ、私はなんて馬鹿なことをしたんだろう。

もしかしたら。いや、きっと。

ニコルは”あの時”の黒猫だったかもしれないのに。

———もちろん、確証はない。

でも、確信はある。

私は彼の言う事なんて気にも留めず、ただ黒猫というだけで拒絶し続けた。

相手の偏見ばかりに惑わされて、その実体、目的なんて知らないままに個人的な価値観だけで相手の優劣、必要不必要を判断していた。

考えてみれば、私はずっとそうだった。友人や先生、加えては親に対しても、相手が本当に思っていることなんて気にすることなく、自分の感情だけをぶつけてきた。母や友人———特に歩美なんかは良い人過ぎるから、言わなかつただけかもしれない。そんな事を考えると、

胸の奥が鉛の様に重くなった。ざあざあと打ちつける雨が、しっとりと私の身体を濡らす。

早く、早く行かないと。

早く。早く。

呪文を繰り返し唱えるように心中で呟きながら、私は住宅街を抜けた。

目の前に広がる、雨天の大通り。相も変わらず車が右往左往し、そして人間の数は少ない。平日の昼間だというのに、どうしてこんなに車があるんだろうか。

どうでもいいことをぼやきながら、私は横断歩道へと向かう。

もちろん、そこには猫の姿は残っていなかった。

恐らく、処分されてしまったのだろう。

「あ……………」

私はマヌケな声を漏らして、青信号の灯った横断歩道を歩いて行く。

八、キミヲキオク

脳裏では次から次へと回想が繰り返された。

初めて私のあげたミルクを飲んでくれた日。

初めて一緒に散歩をした日。

初めて一緒にベッドで寝た日。

初めて私にすり寄って来てくれた日。

私が喜んでいるときは、そばにいてくれた。

私が起こっているときも何も言わずそばにいてくれた。

私が悲しんでいるときも、ずっとそばにいてくれた。

何か慰めをしてくれたわけじゃなかった。

でも、かけがえのない大切な何かをくれた。

だけど。

そんな彼が突然いなくなって、私は号泣した。

同時に、部屋が猫の毛と共に荒らされているのを見て、私は絶望した。

その時に、決めたんだ。黒猫なんか、嫌いだ、って。

いつしか黒猫を忌むべきものとするオカルトなるものを見つけて、嵌りこんだ。

だけどそれは、逃げているだけだった。

あの時、あの猫——『ニコル』は、私の部屋を荒らしたわけじゃなかったんだ。

あの時、なくなっていたのは一つの写真。

そう、私とニコルと一緒に写っていた、あの写真。

どうしてニコルがいなくなったかなんて、私には分からない。

いや、きっと私みたいに心の汚れた人間なんかには、到底分かりえない。

いつでもニコルはそばにしようとしてくれていた。

昔も。もちろん……今も。

それなのに、私は、私は。

無意識のうちに、涙がこぼれてきた。

今は泣いてる場合じゃない。早く、早く大通りまで行かないといけない。

私は力の限り、走り続けた。

雨の中。

人がさほど多くない大通り。

青に変わる信号。

猫どころか何もいない、横断歩道。

「……………」

当たり前だ、と私は思った。

もうニコルは、轢かれてしまったんだ。

あの時横断歩道に横たわっていた猫は、ニコルだったんだ。

私は横断歩道の上を、のろりと歩いた。

信号機が点滅を始めるのにも、気付かずに。

そして、ニコルが轢かれていた辺りまで来ると……

足に力が入らなくなって、その場に崩れ落ちた。

「う……………」

頭から倒れてしまったため、意識が少し遠くなる。今更気付いたけれど、体中が雨で濡れて凄く寒い。手と足が震えて動かない。

やっとの思いで、上半身を持ち上げると。

すぐ目の前まで、轟音を纏ったトラックが近付いていた。

———いいんだ。これで、いいんだ。

———私が今まで犯した罪に比べれば、これくらい軽いもんだ。

———私の、命なんて。

私は目を閉じて、迫り来る脅威を真正面から受け止める。

『ダメですよ。命を粗末にしちゃ』

次の瞬間、私は何かに思い切り突き飛ばされて、歩道の辺りまで飛んでいった。

「うっ……………」

だけど不思議なことに痛みは感じなかった。どうやら、車には轢かれなかったみたいだ。
だとすると、どうやって私はここまで飛ばされた？
震える身体を叱咤激励して、横断歩道のほうを見やる。

そこに立っていたのは、微笑みを浮かべる一人の”人間”だった。

———”猫耳”が、植えついている。

「ニコ……………!!」

私はその名前を、呼ぶ前に。

その人は、車の行き交う中へ、姿を消した。

後に残されたのは、座り込んだままの私だけだった。

「あ……………」

言葉も、何も出なかった。

頬をぬらすのが、雨なのか、涙なのかも区別が付かなくなった。

それは、雨がやんでからも、ずっとそうだった。

○

その日の夜、私は風邪を引いた。しばらくぶりの風邪を引いた。

頭が痛くて、どうかなってしまいそうだった。

次の日。

昨日、どこで、何があったのか。

私は何も、思い出すことが出来なくなっていた。

それからもう、一ヶ月が経つ。

九、幸せな黒猫

「優子ー？ まだ帰らないのー？」

「あ、うん。ちょっと待ってて」

明日の日課表を確かめながら、私は持って帰る教科書の取捨選択をする。むむ。明日は数学の中テストがあるのか。ならば数学の置き勉強は出来ない。しかし……そうすると現代社会の資料集と数学の教科書がひしめき合っただけじゃ鞆がパンパンになってしまう。私のバッグは熊の形をしたリュックなんだけれど、これじゃ蜂蜜大好きプー〇ん並みのおなかぽっこりベアになってしまう。それは避けたい。ならば……

「優子。どうせまたあんたどれを持って帰ろうかで迷ってるんでしょ？」

「何故分かったし」

歩美はいつのまにエスパーになっていたんだらうか。

「別に数学の勉強する気もないんでしょ？ 置いて帰ればいいじゃない」

「失敬な！ 明日は中テストなんだよ！ 勉強しないはずがないじゃない！」

「その言葉をもう何回聞いてきたことか」

「いや、今回こそは……」

「という言葉もかれこれ何回聞いてきたことか」

「いやいやちょっと待ちなすって歩美さん……」

「いいから早く帰るわよ」

「ぐえ」

そんなこんなで、私は何故か猫みたいに歩美に首根っこを掴まれたまま帰ることになった。これはこれでなかなか楽なんだけど、廊下ですれ違うみんなの顔がまともに見れない。

———猫、か。

「一ヶ月か。時間が経つのは早いよねー」

「ううむ？」いきなり何の話だろう。

「ニコル君よ、ニコル君。いなくなってからもう一ヶ月でしょ？」

「ああ………そういえばそんなのもいたっけか」

「ひどいこと言うわねー」

歩美が引きずっていた手を放す。………え？

「はみゅん」

もちろん私は垂直落下した。頭を床に殴打された。

「何でいきなり手を放すの!？」

「あんたマゾでしょ？」

「いや、答えになってない。確かにマゾだけど答えになってない」

「とうとうマゾって認めたか……まあいいけど」

私に手を貸すわけでもなく、歩美は歩き始める。私が投げつけたバネのように飛び上がったせいもあるだろうけど。

「おう、桜井じゃねえか」

と、後ろから響く聞きなれた声。この声は……

「北条君」

「お前制服埃だらけだな……何やってんだ、一体」

「廊下に頭を殴打された」

「つまりそれは思いっきりこけたと解釈していいのか？」

「失敬な！ 大体あってるけど失敬な！」

私は必死に言い返すが、北条君は呆れ溜め息を吐くばかりだった。

「やれやれ、なんでこんな奴を俺はす……ゲフンゲフン」

途端、北条君がわざとらしく咳払いする。見るからに怪しい。

「ん？ 俺は……何だって？」

「うるせえ！ 何でもねえからそれ以上聞くな！」

「何その必死の弁解。絶対怪しい。何か隠してるでしょ」

「か、関係ねえよお前には！ いや、ないつつたら嘘になるが……少なくとも今お前に言うことじゃねえ！」

「お？ 段々ボロが出てきたかな？ そろそろ白状したらどうなんだ北条く……ぐえ」

再び掴まれる首根っこ。私は猫か。

「ほーらさっさと帰るわよ優子」

「分かったからその手を放してください」

そして再び廊下に頭を殴打される。

「だから普通に放してって言ってるじゃない！ 歩美は私を何だと思っているの!？」

「鈍感」

「はあ？」

歩美は一体何のことを言ってるんだろう。

「ニコル君のことと言い……あんたは本当に鈍感よ」

「何が何だか分からない」

「……ま、それが優子らしさなのかもね」

歩美は少しだけ笑って、歩いていく。

私は慌てて立ち上がると、その背中に遅れないように駆け出した。

○

太陽に炙られた空気がむわっと押し寄せる。

夏休み前最後の登校を終え、私と歩美は帰路に着く。一週間後から何日間かの補習が始まるけど、それまではとりあえず夏休みを満喫しよう。

「ねえ優子」

途中で買ったアイスを舐めながら、歩美が言う。

「補習の前にさ、どこか遊びに行かない？ 電車乗ってでもいいし、嫌なら近場でもいいし」

「あ、いいね。電車乗ってどこか行こう」

私は一足先に舐め終わったアイスの棒を突きつけながら答える。ちなみに10円当たり。

「いつから行く？ 明日ぐらいから行っちゃおうか？」

「そうだね、出来るだけ早く夏休み満喫したいしね。明日行っちゃおう」

「それじゃあどこに――――」

私と歩美は終始遊びの話に徹した。

やがて、そのネタが尽きると、もう一度優子が切り出す。

「……ニコル君、どこ行っちゃんたんだろうね」

「ん？ またあいつの話？」

歩美は少し寂しそうな顔をしながら、呟く。

「いや、ニコル君も一緒に遊びにいけたらなー、とか思ったりして」

「ふーん」

私は抑揚なく言う。ちなみに歩美には「ニコルはいなくなった」とはいったが、いなくなった理由は何一つとして伝えていない。ま、そもそも私にも分からなかった。

一ヶ月前までは。

「優子には居場所分らないの？」

「私が知ってるだけでもお思いになって？」

「……だよねえ」

はあ、と歩美は溜め息をつく。そんなに溜め息ついてるとすぐおばあちゃんになっちゃうぞ。

「誰がおばあちゃんよ」

どうやら声に出ていたらしい。やれやれ私は殴られた。

「ともかく、私はニコルの居場所は知らない」

そして、歩美はあの儀式の期限は一ヶ月ということを知らない。

「だから、あきらめたら？」

「うーん……そうするしかなさそうね」

「それでいいんじゃないよ」

「何その口調」

「歩美がおばあちゃんなら私はおじいちゃんかなと思って」

再び殴られた。

「それじゃ、また明日ね」

「うん、ばいばい」

私は歩美と別れると、いつも通りの帰り道をすたすたと歩く。

いつも通り。———そう。

いつも大体こんな調子だった。むしろあの何日かが狂っていたんだ。

あのときの私は、もういない。

あの時は偶々、少し方向性が違ってしまっただけなんだ。

だから、こんなことはもう終わり。私はもう、いつもの私に戻った。ただ、それだけのこと。

何も変わらない毎日を、ようようと過ごしていく。

本当にそれだけだけど、絶対に失うことは出来ない日々。

———私たちはそれぞれ生きていくベクトルこそ違うけど。

ベクトルってものは平行じゃない限り、絶対どこかで交わっていく。

そして、この世界には一つとして平行なベクトルはないと、私は信じている。

そして、夜。

○

「……これで完璧」

私はそう呟いて、右手に握り締めた木の棒をぱっと上げた。

左手には、「幸せを呼ぶ魔法」と銘打たれた、少し厚めのオカルト本。……その二三七頁、「幸せを呼ぶ使者を呼び出す魔法陣」なるものを私は信じ込み、今まさにそれを家先の砂地に書いている最中だった。

で、ようやくその製図が終わった。しかし我ながらまたもや上手く描けたと、感心する。

時刻はもう、深夜二時を越えているだろう。

つい綿密に描きすぎて、十二時頃から始めていたと思っていたのだが、気がつけばもうそれから既に二時間が経過している。

過剰に没頭した人間が陥る時間感覚喪失に、私は遭遇した。親が飛び起きてこなかったことに本気で安堵している。いや本当。

私は木の棒をぽいと放り投げ、序で左手で開き持っていた魔法書（仮）をたたみ、眼下の魔法陣を目にして仁王立つ。

「……………」

ニコルがいなくなってから、今日で一ヶ月。

本日はくしくも、『あの儀式』を再び行うことが出来る、いわば解禁日だった。つまり、私は今度こそ自分に必要不可欠な使者を呼び出すことが出来るのだ。

私は、すう、と深く息を吸い込む。

今度こそ呪文は、完璧に覚えている。邪魔者は何もない。

だから————

「我は望を請（せい）う者に在り。我が望を叶えたまへ————」

私はもう、迷わない。

今までどおり、のんびんぐらりと生きていくだけ。

ずっと、ずっと。これからも。

「———”黒猫”」

私はゆっくりと、魔法書を閉じた。